

自分とは何か  
その他

目次

一、 自分とは何か

二、 小林秀雄とランボー

三、 中原中也の思い出

※ 参考文献

自分とは何か

## 自分とは何か

例えば、デカルトは、疑わしいものは、すべて疑ってみた結果、どうしても疑うことができないものとして、それは、「今、現にこうしてあれこれ疑っている自分だけは疑うことはできない」という、極めて有名な「方法的懐疑」のいわば究極の地点にまで到達することになるわけだ。それが、有名な「われ思う、ゆえにわれあり」という言葉になるかと思う。そして、この「われ思う、ゆえにわれあり」という言葉は、例えば、「自分とは何か」という問いに対して、「自分」（つまりわれ）とは、すなわち、ああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている「思惟主体」のことであり、そして、ああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている「思惟主体」こそは、まさに「自分」（或いは自分自身）であるという確信を得るわけである。そして、ああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている「思惟主体」とは、プラトンの有名な「魂の三区画」から言えば、いわゆる「理知的部分」こそは、まさにああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている「思惟主体」そのものであり、それゆえ、「自分」（或いは自分自身）とは、すなわち、「思惟主体」のことであり、それは、「知性＋理性＋母体のようなもの」からなり立っている「理知的部分」に他ならないということである。

例えば、自分というものを一般的に定義する場合には、自分とは、まず「身体と精神（魂）」からなり立っている存在である。そして、他人から見れば、「自分の存在」とは、何よりも「身体的存在」であり、それゆえ、一般に「相手の身体」こそ、まさに「その人自身」であるという印象を与えるものである。しかし、当人（本人）にしてみれば、確かに「自分の身体」は、「自分」という存在に間違いはないが、しかし、「自分自身」（つまり「本当の自分」）とは、ああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている自分（つまり「思惟主体」）こそ、まさに「自分自身」（本当の自分）であるという認識を持つているものである。だからこそ、自分の「身体的特徴」だけを見て、あの人は、ああだこうだと言われた場合、いや、本当の自分は、そうではなく、むしろこうなんだと、強く反論することにもなるわけである。そして、自分に関して、ああだこうだと言われた時に、ああ、なるほど、と思ったり、いや、そうではないと、思ったりする主体こそ、まさに「その人自身」ということになるのだろう。それに比べて、自分の身体というのは、間違いなく、自分のものではあるが、なかなか自分の思い通りにはならないものである。例えば、もっと綺麗になりたいとか、もっとやせたいとか、また、もっと背が高くなりたいとか、その他、そのようにあれこれ思っても、なかなか自分の思い通りにはならないものである。それはともかく、そのように自分の身体に対して、ああであってほしい、こうであってほしいと、あれこれ注文を出している主体こそ、まさに「その人自身」ということになるのだろう。すなわち、「自分自身」（本当の自分）というのには、「精神」（魂）の方にこそ、存在することになるかと思う。もし、「自分自身」（本当の自分）というものが、身体の方にこそ、存在するとすれば、長年の修行の末に、両手足を失ったと言われる「達磨」には、（もちろん、伝説であるが）、すでに「自分自身」（本当の自分）は、完全な形ではもう存在しないことになってしまっただろう。しかし、実際は、たとえ両手足を失ったとしても、それで「自分」という意識というものは欠けたりはしないだろう。それゆえ、「自分自身」（本当の自分）というのには、「精神」（魂）の方にこそ、存在することになるかと思

う。そして、プラトンは、われわれ人間の「魂」を「欲望的部分、気概（激情）的部分、そして、理知的部分」の、この三つに分けたということである。

そして、多くの人たちが、「自分自身」（本当の自分）は、いわゆる「本能的部分」にこそ、存在すると考えているかと思う。確かに、そういう感じを与えるものである。例えば、下等な動物たちは、まさに「本能的部分」に支配されて生きているものであり、それゆえ、下等な動物たちの「自分」とは、すなわち、その動物の「本能的部分」にこそ存在することになるのだろう。それに間違いはない。ただ「本能的部分」に全面的に支配されて生きている動物には、いわゆる「自分という意識」は持てないことになる。つまり、「本能的部分」に支配される割合が多くなればなるほど、その動物の行動は、まさに本能のまま（つまり無意識で）行動をしていることになるからである。一方、大脳の発達した「哺乳類」ともなれば、それなりの「知力」を持っているので、あれこれの判断ができるようになるかと思う。しかし、その判断も、基本的には「本能的部分」に強く支配されているものであり、人間のような本格的な「思考（思索）活動」などは、できないものである。

例えば、動物の場合、何かものを食べたいという欲求が生じてきた場合には、とにかく（或いは基本的には）、身近にあつて、簡単に捕まえることのできるものを食べていることになるのだろう。しかし、われわれ人間の場合には、動物たちとは違って、身近にあるものをただ黙って食べているのではなく、ああでもない、こうでもない、あれこれその人なりの注文をつけたものを食べているのだろう。つまり、「何かものを食べたいという欲求（つまり食欲）」そのものは、われわれ人間の場合でも、また、ほかの動物たちの場合でも、基本的には全く同じものであり、いわゆる「本能的部分」から生じてくるものであるが、しかし、こういう調理でこういうものが食べたいという、その人なりの思い（欲求）は、むしろその人の「理知的部分」から生じて来るものである。すなわち、「本当の自分」（或いは自分自身）というのは、どちらかと言えば、やはり、その人の「理知的部分」の方にこそ、存在することになるのだろう。

つまり、われわれ人間には「二つの源泉」があり、その一つは、「本能（欲望）的部分」を源泉とするものであり、それは、ほかの動物たちにもすべて共通したものである。一方、われわれ人間には、いわゆる「人間へと進化」してくる過程で生じて来た、もう一つの源泉を持っているわけである。それが、すなわち、「理知的部分」を源泉とするものであり、その「理知的部分」こそは、まさにああでもないこうでもないと思ったり考えたりしている主体でもあるわけだ。そして、この「二つの源泉」、一つは、「本能（欲望）的部分」であり、そして、もう一つは、「理知的部分」であるが、そのどちらかの方にこそ、まさに「本当の自分」（或いは「自分自身」）が深く眠っていることになるだろう。

例えば、われわれ人間の「心の中」には、実に様々な「欲望や感情」などが絶えず現われたり消えたりしているものであり、それゆえ、そのような様々な「欲望や感情」などに振りまわされている自分こそ、まさに「自分自身」（本当の自分）であると思ひ込みやすいものである。しかし、ここでよく考えてもらいたいと思うことは、確かに、われわれ人間の「心の中」には、実に様々な「欲望や感情」などが絶えず現われたり、消えたりして、例えば、ああしたいとかこうしたいとか、あれがほしいとかこれがほしいとか、また、誰々が好きだとか嫌いだとか、誰かをうらやましいと思ったり憎らしいと思ったりしているのと同時に、もう一方では、そのように自分の「心の中」に現われた実に様々な「欲

望や感情」などに対して、例えば、いや、そんなことはできないとか、いつまでもそんなつまらないことにこだわっていてどうするんだなどと、絶えず「チェック」を入れている。「もう一人の自分」が間違いないはずである。つまり、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている自分と、そのような自分に絶えず「チェック」を入れている「もう一人の自分」とがいて、前者が、いわば「本能（欲望）的部分」であり、そして、後者が、いわゆる「理知的部分」ということになるのである。

それでは、そのどちらに本當の「自分自身」（いわば真我）は、内在することになるのだろうか。もちろん、そのどちらも本當の「自分」に間違いはないが、しかし、「自分をまさに自分たらしめているもの」は、どちらかと言えば、それは、やはり「理知的部分」のほうではないかと思う。というのも、「本能（欲望）的部分」そのものは、ただ、もうああしたいとかこうしたいとか、あるいはあれがほしいとかこれがほしいとか言った、いわば「盲目的な欲求主体（或いは感情主体）」なのである。例えば、お金がほしいとか、セックスがほしいとか、また、車がほしいとか、豪邸に住みたいとか、その他、そのような衝動にかられた時に、もうどのような方法でも、手に入れたと思うわけである。それが、まさに「本能（欲望）的部分」である。しかし、その時に、「もう一人の自分」の方から、「いや、お金は欲しいが、盗みはよくないとか、セックスはしたいが、無理やりはよくないとか、その他」、そのような様々な「チェック」が入ることになるかと思う。それによつてこそ、その人は、「人間らしい行動」ができるようになるわけである。つまり、われわれ人間の「理知的部分」こそは、まさにわれわれ人間をして「人間らしい行動」（或いは「その人らしい言動」）をさせている主体なのであり、その「理知的部分」のなかにこそ、いわゆる「自分自身」（本當の自分）が内在していることになるのである。

もつと分かりやすく言えば、誰でも、お金はほしいと思うし、セックスはしたいと思うわけである。それゆえ、そのような基本的な欲求だけを持って、まさにその人自身（本當の自分）であるとすれば、誰も彼もがほとんど同じ欲求を持っているので、いわゆる「個性」などはどこにもなくなってしまふのである。それゆえ、むしろ、ある人の「心の中に」、「お金がほしいとか、セックスがしたいとか」という様々な欲求が生じてきた時に（それは、誰の心にも生じて来るものであるが）、そのような時に、その人がその欲求に対して、どのように「対応・対処」していくかに、むしろ「その人自身」（つまり個性）がはっきりと表れてくるものである。何度も言うように、誰の心にも「食欲、性欲、物欲、金銭欲、その他」の基本的な欲求（欲望）は、生じて来るものであり、それ自体にそれほど個人差はないのである。むしろ、その時に、その「欲求（欲望）」をどのようにして満たそうかと、あれこれ思考をめぐらし行動していくところにこそ、まさにその人自身の「特徴（つまり個性）」が、はっきりと表れるものである。そして、その人があれこれ思考をめぐらした結果、あれにしようとか、これにしようとか言った判断を下すのは、言うまでもなく、その人の「理知的部分」の領域になるわけである。すなわち、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを創り出しているのは、まさに「理知的部分」であり、また、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等を行なっているのも、まさにその人の「理知的部分」である。つまり、「理知的部分」こそは、その人をして「その人らしい行動」をさせている主体なのである。もつと言えば、われわれ人間から、「理知的部分」を取り除いてしまえば、われわれ人間も、

ほかの動物たちと基本的にはまったく変わらない存在になってしまおうということである。それゆえ、われわれ人間の「理的的部分」こそは、まさにわれわれ人間をして、「人間らしい言動」(或いは「その人らしい言動」)をさせている主体なのである。そして、その「理的的部分」の中にこそ、まさに「自分を自分たらしめている本来の自分」が内在していることにもなるということである。

それでは、どうすれば、本来の「自分自身」(いわば真我)にめぐり逢うことができ得るのだろうか？ 例えば、誰でも、自分とは、一体、どういう人間だろうか、あれこれ自分なりに思いをめぐらしては、自分とは、大体、こういう性格や特徴を持った人間である、という自己認識を持っているかと思う。しかし、それは、自分であれこれ自覚できる自分のことであり、自分でも自覚できないもつと深奥にある「自分自身」(それこそが真我である)が、その「真我」にどうすればめぐり逢うことができるのか。これは、意外と難しい問題ではあるが、しかし、その一つの方法としては、例えば、孤独ひとりぼんやりとももの想いに耽っているような時には、様々な「欲望や感情」などはうすれている状態であり、そのような時には、本来の「自分自身」(つまり「純粹自己」)となつて生きていることになるかと思う。また、何か「研究活動」や「創作活動」などに深く溶け入っているような時にも、様々な「欲望や感情」などから解放されて、より密度の高い、それだけ自身身になりきつて生きている状態になるとともに、いわゆる「理的的部分」に全面的に支配されて、何らかの「研究活動」や「創作活動」などに時間の経過を忘れて深く溶け入っているような時にこそ、まさに「精神の飛翔」というようなものは、生じやすくなり、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密にとらえることにもなるわけである。そして、そのようなことを何年も積み重ねながら、最終的には真に「内的成長」を遂げることによってこそ、その人は、ほんとうの意味での、まさに真の「自己」(つまり真我)にめぐり逢えることにもなるのだろう。

ちなみに、仏教の「考え方」に従えば、すべてのものは、絶えず変化しているものであり、それゆえ、「自我」(或いは自己)などは、どこにも存在しないのだということになるのかも知れない。もちろん、それは、それで正しい「考え方」ではあるが、ただ、それでは、例えば、ソクラテスの「なんじ自身を知れ」という言葉も、また、いわゆる「自己認識」という言葉も、まったく意味を失ってしまうものであり、それゆえ、一般的には「自我」(或いは自己)というものを前提として考えを進めてもよいものであり、それをデカルト自身の言葉で言えば、いわゆる「われ思う、ゆえにわれあり」であり、その「思う主体」こそは、まさに「われ(つまり自分)」に他ならないということである。

最後に、もう一度、再確認しておきたいと思うが、デカルトは、疑わしいものは、すべて疑っていき、そして、最終的にどうしても疑え得ないものとして、それは、「今、現にこうしてあれこれ疑っている自分だけは疑うことができない」ということで、いわゆる「われ思う、ゆえにわれあり」ということになるわけだが、それは、いったいどういうことかと言えば、それは、ソクラテスが実際に行なっていたこととも共通するものであり、一般に、そうだと思われているものも、実はそうではなく、それではこうなのかと、次から次へと考えや思いなどを新たにしながら、疑わしいものを徹底的に疑っていくうちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまつて、もう何がなんだか自分

でもよく分からないような世界に深く陥ってしまふ、そういう、いわゆる「虚無の世界」のどん底まで行ったということである。そして、その「虚無の世界」のどん底とは、あらゆるものの「意味や価値」などが消えてしまふような世界であるとともに、見る自分と見られる自分との間に何もなくなってしまう、また、問う自分とそれに答える自分自身との間に何もなくなり、終にはお互いがさし向かいになっている状態であり、それは、疑わしいものをすべて徹底的に排除したら、終には問う自分とそれに答える自分自身だけになつてしまひ、その間には何もなくなつてしまつたということである。それが、すなわち、「われ思う、ゆえにわれあり」という最終到達地点であるとともに、問う自分が意識的な「自我」（いわば「氷山の一角」）であるとすれば、それに答える自分自身とは、まさにもつとその深奥にある「思惟母体そのもの」（いわば海中の「巨大な氷山」）ということになるかと思ふ。そして、この地点、つまり、問う自分とそれに答える自分自身との間に何もなくなり、終にはお互いがさし向かいになっている状態であるが、そこまで行けば、やがて、お互いが「一体」となる、いわゆる「内的成長」の一つの到達点にまで辿り着くことができ得るとともに、その「地点」こそは、まさに「真の「自分」（つまり真我）にめぐり逢える地点でもあるということである。

\*

\*

さて、もう一度、「自分とは何か」について、考え直してみたいと思うが、まず、われわれ人間というのは、いわゆる「身体的部分」と「精神的部分」からなり立っているものである。それに間違いはない。そして、われわれ人間の「身体的部分」というのは、われわれ人間の「五感」によつて、まさに「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知る」ことのでき得るものであり、それゆえ、その人が本来望むだけ「より詳しく知ること」のでき得るものである。一方、われわれ人間の「精神的部分」というのは、自分で自分の「精神的部分」をより詳しく知ること、ある程度は可能であるとしても、しかし、他人が他人の「精神的部分」をより詳しく知ること、極めて難しいことになるかと思ふ。

それでは、われわれ人間の「精神的部分」というのは、一体、どのような構造になつているのかと敢えて問えば、それは、次のようなものになるかと思ふ。——まず、われわれ人間の「精神的部分」、つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）では、実に様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などが絶えず現われたり消えたりしているものであるが、その「精神的部分」、つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）を敢えて大きく「三つ」に分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々を生じる、様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」として、この世に生まれて今日まで生きてきた、その「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などの膨大な量の蓄積（蓄え）と、もう一つは、まさに親から受け継いだ「遺伝子」等があるということである。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めて見ているようなところがあるかと思ふが、それは、なぜかと問えば、それは、他人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的

な「姿・形」<sup>すがたかたち</sup>やその人の表面的な「言動」などは、われわれ人間の「五感」（つまり見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知ること）などを通して、それなりにはつきりととらえることができるからであり、一方、他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういうふうになっているかなどは、誰にも分かりようがないものであり、せいぜい「表面的部分」（その時々<sup>とき</sup>に生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」）などを知る程度であり、もつと奥深くにある「中間的部分」や「深層的部分」などは、本人が、うそ偽りなく、正直に告白しない限りは、なかなかとらえにくいものになるということである。

つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）には、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などが深く眠っていると、その「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが自然と生み出されては、その人というものをまさに形成（形づくって）いるものであり、一方、われわれ人間というのは、他人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などのそのすべてを知りようもないものであり、それゆえ、その一人一人の他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういうふうになっているかなどは、誰にも分かりようのない、まさに「ブラッ、ク、ボックス」状態であり、それゆえ、その人が、何を思い、何を考えているかなどは、厳密には何ひとつ分からないということになるのだろう。

さて、自分というのは、まさに「身体的部分」と「精神的部分」からなり立っている存在であり、その「身体的部分」というのは、われわれ人間の「五感」によって、誰でも容易に「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知ること」のでき得るものであるが、一方の「精神的部分」というのは、まさに「表面的部分」と「中間的部分」それに「深層的部分」からなり立ち、その中でも、この世に生まれて今日まで生きてきた、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などの膨大な量の蓄積（蓄え）と、もう一つは、まさに親から受け継いだ「遺伝子」等こそは、まさにその人の「深層的部分」そのものであり、そこからこそ、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが自然と生み出されては、その人というものをまさに形成（形づくって）いるものであり、それゆえ、その「深層的部分」こそは、まさにその人の「根源」<sup>ねげん</sup>そのものであるとともに、そこにこそ、その人をその人たらしめている、まさに「源泉」<sup>げんげん</sup>そのものがあるということである。

\*

\*

小林秀雄とランボー

## 小林秀雄とランボー

小林秀雄は、なぜ「ランボー」をあれほど熱く語ったのか？ この問題は、一般にはどうでもよい問題かも知れないが、それでも、なかなか興味深い内容を内に宿しているので、まず、彼自身の言葉を『ランボオⅢ』から引用し、それから少し考えてみたいと思う。

「……僕が、はじめてランボオに、出くわしたのは、廿三歳の春であった。その時、僕は、神田をぶらぶら歩いていて、と書いてもよい。向うからやって来た見知らぬ男が、いきなり僕を叩きのめしたのである。僕には、何んの準備もなかった。ある本屋の店頭で、偶然見付けた『地獄の季節』の見すばらしい豆本に、どんなに烈しい爆薬が仕掛けられていたか、僕は夢にも考えてはいなかった。（中略）、そして、豆本は見事に炸裂し、僕は、数年の間、ランボオという事件の渦中にあつた。それは確かに事件であつた様に思われる。文学とは他人にとつて何んであれ、少なくとも、自分にとつては、或る思想、或る観念、いや一つの言葉さえ現実の事件である。と、はじめて教えてくれたのは、ランボオだった様にも思われる。……」（中略）

当時、ボオドレエルの『悪の華』が、僕の心を一杯にしていた。と言うよりも、この比類なく精巧に仕上げられた球体のなかに、僕は虫の様に閉じ込められていた、と言つた方がいい。その頃、詩を発表し始めていた福富太郎から、テキストをもらったのであるが、それをぼろぼろにする事が、当時の僕の読書の一切であつた。僕は、自分に詩を書く能力があるとも、また、詩について何ら明らかな観念を持っていたわけでもない。ただ『悪の華』という辛辣な憂鬱な世界には、裸にされたあらゆる人間劇が圧縮されている様に見え、それで僕には充分だったのである。

確かに、それは空前の見ものであつたが、やがて、精緻な体系の俘囚となる息苦しさというものを思い知らねばならなかつた。実際この不思議な球体には、入口も出口もなかつた。——「猫つかぶりの読者よ、私の仲間よ、兄弟よ」——魔法の様な声で呼び込まれたのは、どんな隙間からだつたかわからなかつたが、作者に引摺られ、引廻されて、果てまで来ると、彼が「死」に呼び掛ける声をする。「船長、時刻だ。碇をあげよう」、しかし、老船長は、決して碇をあげはしなかつた。その代り「猫つかぶりの読者よ」と又静かに始める様に思われた。僕は、ドオムの内面に、ぎっしりと張り詰められた色とりどりの壁画を仰ぎ、天井のあの辺りに、どうかして風穴を開けたいと希つた。すると、丁度その辺りに、本物の空よりもっと美しい空が描かれているのに気付いた。「旅への誘い」の音楽が鳴り渡り、その出発禁止の美しい旋律は、詩の不信者の胸を抉つた。そういう時だ、ランボオが現れたのは。球体は砕けて散つた。僕は出発する事が出来た。何処へ——断つて置くが、僕は、過去を努めて再建してみたまでだ。

\*

\*

さて、引用が長くなつたが、しかし、これは、実に見事な文章であり、当時、まだ二十三歳前後であつた小林秀雄の「内的状態」が、あたかも透けて見えてくるような文章である。——例えば、「……僕が、はじめてランボオに、出くわしたのは、廿三歳の春であつた。その時、僕は、神田をぶらぶら歩いていて、と書いてもよい」という文章があるが、これは、実際に神田の古本屋街をぶらぶら歩いていてという意味だけに留まるものではない。

い。もっと広い意味では、この若い時期には、いわゆる古今東西の「数多くの書物」などを読み耽っていたということである。つまり、この若い時期には、自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」に襲われて、もう手あたり次第に数多くの書物を読みあさるような「精神状態」であった、ということの意味している。それでは、なぜこの若い時期には、自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」に襲われるのだろうか？

それは、「精神的にも肉体的にもまさに成長期」にあたっているからである。そして、肉体がどんどん成長するためには、様々な栄養価の高い「食料」などをどんどん摂取することが、必要不可欠であるのと全く同じように、その人の「心の中」に生じてきた「自我」（自己）が、真に成長するためには、栄養価の高い高質な「知的食料」などをどんどん摂取することが、どうしても必要不可欠になって来るからである。それゆえ、なぜ、この若い時期に、自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」に襲われるのかと言えば、それは、その人の「心の中」にはつきりと目覚めてきた「自我」（自己）が、真に成長することを望んでいることから生じる、まさに「精神的空腹感」なのである。そして、それは、様々な真に優れた高質な「書物」などを深く読み耽ることによって、その人の「内的世界」というものは、自分でもはつきりと自覚できるほど激しく「変化」（成長）していくことになるわけである。そして、毎日が「読書三昧」のような生活を送っていると、やがて、次のような不可解な「精神状態」が生じて来ることもなるのである。

それは、今までは、主に外に向いていた目を、逆に、内に向けることが多くなることで、孤独ぼんやりと「物思い」に耽ったり、あれこれ「自問自答」をすることが多くなるかと思う。そして、そのように目を内に深く向けて、「思惟界」で多くの時間を過ごすようになるのと、今度は、その目を外に向けて、「外界」を見た時に、なぜか見るものすべてが「幻」のように感じられ、実在感がうすれるような感じにもなるかと思う。また、昼間の「太陽の光」が、なぜか今までより眩しく感じられ、それゆえ、昼間、外に出ることが、とかく億劫になるとともに、逆に、夜の「星明かりや月明かり」などがちようどよく感じられ、それゆえ、暗くなってから外出するようなことが多くなるかと思う。もちろん、この時期は、いろいろな「書物」を深く読んだり、また、文学や芸術などの「創作活動」に夢中になったり、或いは、学問などで人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを愛し求めて、本格的な「思考（思索）活動」を何年も積み重ねている状態であるとともに、一方では、底知れぬ「孤独感」や「虚無感」（ニヒリズム）やその他などに襲われたり、あるいは何をすることも億劫で、非常に気だるい「倦怠感」に襲われることも多くなるかと思う。

それは、ボオドレエルの『悪の華』に出てくる言葉を借りれば、「……地上を好んで廃墟（虚無）と化し、欠伸の中に、世界を嘔む。これぞ、倦怠。——眼に思はずも涙を湛へ、長き煙管（思索）を燻らせて、断頭台（死）の夢を見る。読者よ、君はこれを知る、この微妙なる怪物を……」ということになるわけだ。そして、それこそは、まさに「虚無の世界」であるとともに、精神状態は、まさに「神経衰弱」状態にあったということである。そして、二十三歳前後のまだ若い小林秀雄という人は、まさにこの「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）にどっぷりと身を置いていたということが、何よりも大事なことになるかと思う。それは、「……当時、ボオドレエルの『悪の華』が、僕の心を一杯にしていた。と言うよりも、この比類なく精巧に仕上げられた球体のなかに、僕は虫の様に閉じ込められていた、と言った方がいい。その頃、詩を発表し始めていた福富太郎から、テキストをもらったの

であるが、それをぼろぼろにする事が、当時の僕の読書の一切であった。……」と。

しかし、やがて、「……確かに、それは空前の見ものであったが、やがて、精緻な体系の俘囚となる息苦しさというものを思い知らねばならなかった。……」ということになるわけだ。つまり、小林秀雄は、ボオドレエルの『悪の華』という作品の球体のなかに虫のように閉じ込められていたわけだが、それと全く同時進行的に、一方では、いわゆる「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）にどつぷりと身を置いていて、前述のような「精神的混乱」などを経験していたということである。そして、その虫のように閉じ込められていた『悪の華』からだけではなく、もう一方の「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）からも何とか抜け出したいという思いが強くなり、そこで、「……僕は、ドオムの内面に、ぎつしりと張り詰められた色とりどりの壁画を仰ぎ、天井のあの辺りに、どうかして風穴を開けたいと希った。すると、丁度その辺りに、本物の空よりもっと美しい空が描かれているのに気付いた。『旅への誘い』の音楽が鳴り渡り、その出發禁止の美しい旋律は、詩の不信者の胸を抉った」ということになるわけだ。それでは、ここに出てくる、「……すると、丁度その辺りに、本物の空よりもっと美しい空が描かれているのに気付いた。『旅への誘い』の音楽が鳴り渡り、その出發禁止の美しい旋律は、詩の不信者の胸を抉った」というのは、一体、どういう意味なのか？ まず、「本物の空よりもっと美しい空が描かれているのに気付いた」というのは、一言で言えば、「作品（つまり観念によって創り上げられた人工的な美しさ）」ということであり、そして、「旅への誘い」の音楽が鳴り渡るとは、一つは、再び、最初に戻るということであるとともに、もう一つは、「自殺への誘い」の音楽が、小林秀雄の「心の中」で鳴り渡ったということでもあるのだろう。それは、『Xへの手紙』という著作のなかでも、「……言うまでもなく僕は自殺のまわりをうろついていた。このような世紀に生れ、夢みる事の速やかな若年期に、一っぺんも自殺をはかった事のないような人は、よほど幸福な月日の下に生れた人じゃないかと俺は思う。俺は今までに自殺をはかった経験が二度ある、一度は退屈のために、一度は女のために……」ということになるかと思う。つまり、その当時の小林秀雄にとって、この底知れぬ「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）から抜け出すための一歩を踏み出すとは、すなわち、「自ら命を絶つ」（つまり「自殺を図る」こと）以外に、いかなる方法もないと思ひ込むような「心的状態」でもあったのだろう。そして、「……そういう時だ、ランボオが現れたのは。球体は砕けて散った。僕は出發する事が出来た。何処へ——断って置くが、僕は、過去を努めて再建してみただ」——ということになるわけである。

さて、小林秀雄が、「ランボオ」にばったりとめぐり逢ったのは、二十三歳の春であった。その当時は、ボオドレエルの『悪の華』によって、その作品の「球体」のなかに虫の様に閉じ込められていたという。そして、その入口も出口もないような「球体のなか」（それはまた「虚無の世界」でもあるわけだが、そのなか）に虫の様に閉じ込められていた時にも、かなり危険な「精神的混乱状態」はあっただろうが、しかし、それは、まだ中期段階の「虚無の世界」ということになるのだろう。ところが、ランボオの『地獄の季節』にばったりとめぐり逢い、それを深く読み耽ることによって、それまでの精神的混乱のかなり危険な状態であった中期段階の「虚無の世界」から、さらに精神的混乱の最も危険な後期段階の「虚無の世界」のどん底まで突き進むような結果になってしまった。それは、彼自身の言葉を借りれば、「……或る全く新しい名付け様もない眩暈が来た。その中で、社会も人間も

観念も感情も見る見るうちに崩れて行く」ような世界である。それは、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまつて、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥つてしまつたとともに、一方では、そのような極めて危険な「精神的混乱」のなかで、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを孤独うつとりと観て取っている（つまり「観照」している）時期でもあり、しかも、それらは、どれもこれもみな美しいものであり、また、美しいと感じられるものであり、それゆえ、もう目も眩むほどの極めて密度の高い「美的世界」（「美の大海原」）を孤独深くさまよっているような「心的状態」でもあるわけである。そして、そのような「虚無の世界」のどん底から、やがて「心の眼」が開ける、いわゆる「内的成長」の一つの到達点へと向かつて行くことにもなるのだろう。……

それはともかく、小林秀雄は、なぜ「ランボオ」をあれほど熱っぽく語つたのか？ それはもちろん、ランボオの「作品」そのものが真に優れていたということになるのだろうが、それと同時に、もう一つの大きな理由としては、小林秀雄は、ランボオによって、いわゆる「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）のどん底にまで突き落とされたとともに、そのランボオによってこそ、やがて、真に「内的成長」を遂げることができたからではないかと思う。そして、小林秀雄は、やがて二十七歳の時に、いわゆる『様々な意匠』で文壇に登場することになるが、その時には、すでに「内的成長」を遂げていたので、その最初の『様々な意匠』の作品の時から、すでに真に「叡知」が働いている「文章（内容）」ともなり得たのではないだろうか。

\*

\*

最後に、もう一度、その要点だけを再確認しておきたいと思う。まず、小林秀雄がランボオとめぐり逢つたのは、二十三歳の春であった。その当時、小林秀雄は、ボオドレエルの『悪の華』を深く読み耽つていて、その比類なく精巧に仕上げられた球体のなかに、虫のように閉じ込められていたという。それは、言葉を換えれば、まさに「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）にどつぷりと身を置いていたということでもあるわけだ。しかし、やがて、「……精緻な体系の俘囚となる息苦しさというものを思い知らされ、（中略）、天井のあの辺りに、どうかして風穴を開けたいと希う」ようになってきた。それは、何とかして『悪の華』（或いは「虚無の世界」）から抜け出したいと、心の底からそう願うようになったということである。しかし、そのように何とかして『悪の華』（或いは「虚無の世界」）から抜け出したいと、心の底からそう願つても、一体、どうすれば、その『悪の華』（或いは「虚無の世界」）から抜け出すことができるのか？ また、そもそも『悪の華』（或いは「虚無の世界」）から抜け出すということ自体、可能なことなのか？ 小林秀雄自身、その答えをまだよく知らなかったに違いない。それゆえ、その一つの方法として、いわゆる「自殺」ということを考えたかも知れない。というのも、この「虚無の世界」にどつぷりと身を置いて様々な「精神的混乱」に深く悩まされていると、ふと「自殺を思う」という時期でもあり、それは、まさに「……地上を好んで廢墟（虚無）と化し、欠伸の中に、世界を嘔吐。これぞ、倦怠。——眼に思はずも涙を湛へ、長き煙管（思索）を燻らせて、断頭台（死）の夢を見る。読者よ、君はこれを知る。……」という時期にあたっているからである。「……そういう時だ、ランボオが現れたのは。球体は砕けて散った。僕は出発することが出来

た。何処へ——断って置くが、僕は、過去を努めて再建してみたまでだ。」ということになるわけだ。つまり、何とかして、『悪の華』(或いは「虚無の世界」)から抜け出したいと、心の底からそう願いながらも、その方法がよく分からず、あてどもなく彷徨っている時に、まさに「虫のように閉じ込められていた球体」を見事に打ち砕いてくれる内容を持った、いわゆるランボオの『地獄の季節』と、文字通り、「運命的な出逢い」をしたということである。

それゆえ、もし、小林秀雄が、三〇歳以降にランボオとめぐり逢っていたら、恐らく、あれほど熱っぽく語ることはなかっただろう。なぜなら、三〇歳以降では、すでにランボオの『地獄の季節』の内容と彼の「心の状態」とは、すでに違ったものになっているからである。つまり、ポオドレエルの『悪の華』を深く読み耽っていた時には、まさにその「内容」と当時の小林秀雄の「心の状態」とは、まさに一つに重なり合うほどまったく同じ「虚無の世界」にどっぷりと身を置いていたということである。やがて、その「虚無の世界」から何とかして抜け出したいと、心の底からそう願うようになった時に、まさにその「心からの要求にぴったりと合った内容を持った本(つまり、ランボオの『地獄の季節』)にばったりとめぐり逢うことによつて、その「虚無の世界」のまさにどん底にまでつき落とされたとともに、やがて、真に「内的成長」を遂げることができ得たということである。だからこそ、まだ若い小林秀雄にとつて、ランボオの『地獄の季節』とのめぐり逢いは、ただ単に「内容の優れた本」にめぐり逢ったというだけではなく、まさに「一大内の事件」ともなり得たわけである。それは、一般に、文学などは、所詮絵空事に過ぎないと思われるているなかで、「……文学とは他人にとつて何んであれ、少なくとも、自分にとつては、或る思想、或る観念、いや一つの言葉さえ現実の事件である。と、はじめて教えてくれたのは、ランボオだった様にも思われる」ということになるわけだ。つまり、ランボオの『地獄の季節』とばったりとめぐり逢うことによつてこそ、いわゆるポオドレエルの『悪の華』の「虚無の世界」よりもう一步先に進んだ、「虚無の世界」のどん底まで突き落とされたとともに、やがて、真に「内的成長」を遂げることができ得たからこそ、あれほどランボオについて、熱っぽく語る最大の要因ともなり得たのだろう。そして、そのランボオの『地獄の季節』とのめぐり逢いこそは、あれこれ読んで、「ああ、面白かった、楽しかった」というような月並な「絵空事の文学」とのめぐり逢いなどでは決してなく、自分の「内的世界」を根底から劇的に変革させる結果となった、まさに文字通りの「運命的な出逢い」ともなり得たわけである。だからこそ、あれほど熱っぽく語ったのだろう。——以上、そして、もう一度、最初の引用文の「文章」から丁寧に読んでもらえれば、ここまでの説明の意味合いが、はつきりと理解してもらえらるだろうと思う。

\*

\*

さて、小林秀雄は、『ランボオⅠ』で、ランボオを熱っぽく語り、また、『ランボオⅡ』では、その熱は、次第にうすれ、そして、『ランボオⅢ』では、ランボオを冷徹に総括しているかと思う。ちなみに、小林秀雄が『ランボオⅠ』を書いたのは、二十四歳の時であり、一方、『ランボオⅡ』を書いたのは、それから四年後の二十八歳の時であった。

つまり、小林秀雄自身、その「本文」のなかで、「……僕は、数年の間、ランボオという事件の渦中にあつた」と言っている。この「数年の間」という言葉を軽く読み流してはいけない。なぜなら、「長年の間」ではなくて、まさにこの「数年の間」に、小林秀雄の

「心の中」が大きく変化したということであり、それは、ランボオの『地獄の季節』とばったりとめぐり逢うことよって、ボオドレエルの『悪の華』の「虚無の世界」よりも、一歩先に進んだ「虚無の世界」のどん底まで突き進んだとともに、やがて、真に「内的成長」を遂げることもなったからであろう。……

そして、小林秀雄は、二十七歳の時に、いわゆる『様々なる意匠』で文壇に登場することになるが、その時には、すでに「内的成長」を遂げていたということになるのかも知れない。だからこそ、その最初の『様々なる意匠』の作品の時から、すでに真に「叡知」が働いている「文章（内容）」ともなり得たのではないだろうか。

\*

\*

中原中也の思い出

## 中原中也の思い出

例えば、小林秀雄の『中原中也の思い出』という作品のなかに、次のような興味深い文章があるので、それを少し引用してみたいと思う。それは、「……晩春の暮方、二人は石に腰掛け、海棠の散るのを黙って見ていた。花びらは死んだ様な空気の中を、まっ直ぐに間断なく、落ちていた。樹蔭の地面は薄桃色にべっとり染まっていた。あれは散るのじやない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めていない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めていない」というところであるとともに、それが興味深いのは、次のような理由からである。——つまり、われわれ人間が外界の「対象を見る」場合には、どうしても「こちら側に自分がいて、向こう側に見る対象がある」という「相対的な関係」になりやすい。そして、われわれ人間は、その見える対象をできるだけ詳しく「観察」（分析）しながら、その理解をより深めていこうとするのが一般的な見方になるかと思う。しかし、そのような「見方」では、どうしてもその対象を「そのままそっくり理解する」ことは、なかなか出来にくいわけである。

ところが、中原中也の「見方」は、それとはまったく違って、自分と対象とが「相対する」のではなく、むしろどこまでも対象の中に深く溶け込んで、終には対象と「一体化」し、そして、自ら「海棠の木」となって、その「内面（内的世界）」を徹底的に生きてみるという「見方」なのである。それは、有名なベルグソンの「直観」という見方であり、対象を「外から見る」のではなく、むしろ「内から観る」という見方である。そして、小林秀雄は、若い頃からベルグソンの著作を愛読していたので、この「見方」をよく知っていたはずである。だからこそ、中原中也の、「……あれは散るのじやない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めていない」という言葉や、葉を聞いて、小林秀雄は、「……何んという注意と努力、私はそんな事を何故だかしきりに考えていた。驚くべき美術、危険な誘惑だ、俺達にはもう駄目だが、若い男や女は、どんな飛んでもない考えか、愚行を挑発されるだろう。……」という下りのところである。それでは、この文章の一体どこがどのように「興味深い」のかと言えば、それは、次のようなところである。つまり、「……あれは散るのじやない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めていない」というところである。一とひら一とひら散らすのには、次のような理由がある。——つまり、われわれ人間が外界の「対象を見る」場合には、どうしても「こちら側に自分がいて、向こう側に見る対象がある」という「相対的な関係」になりやすい。そして、われわれ人間は、その見える対象をできるだけ詳しく「観察」（分析）しながら、その理解をより深めていこうとするのが一般的な見方になるかと思う。しかし、そのような「見方」では、どうしてもその対象を「そのままそっくり理解する」ことは、なかなか出来にくいわけである。

ところが、中原中也の「見方」は、それとはまったく違って、自分と対象とが「相対する」のではなく、むしろどこまでも対象の中に深く溶け込んで、終には対象と「一体化」し、そして、自ら「海棠の木」となって、その「内面（内的世界）」を徹底的に生きてみるという「見方」なのである。それは、有名なベルグソンの「直観」という見方であり、対象を「外から見る」のではなく、むしろ「内から観る」という見方である。そして、小林秀雄は、若い頃からベルグソンの著作を愛読していたので、この「見方」をよく知っていたはずである。だからこそ、中原中也の、「……あれは散るのじやない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めていない」という言葉や、葉を聞いて、小林秀雄は、「……何んという注意と努力、私はそんな事を何故だかしきりに考えていた。驚くべき美術、危険な誘惑だ、俺達にはもう駄目だが、若い男や女は、どんな飛んでもない考えか、愚行を挑発されるだろう。……」という言葉になるわけである。

それでは、なぜ、「驚くべき美術、危険な誘惑だ」ということになるのか？ それは、対象の中にとどこまでも深く溶け込んで、一種の没我的状態になって、その対象を「内から観る」という見方、それこそ、「芸術的直観を生む見方」であるが、そのような「見方」を長く続けることは、われわれ人間の精神にとっては、極めて苦痛であるとともに、極めて危険なことでもあるわけである。だからこそ、「……花びらの運動は果しなく、見入っている切りがなく、私は、急に厭な気持ちになって来た。我慢が出来なくなってきた。その時、黙って見ていた中原が、突然『もういいよ、帰ろうよ』と言った。私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた。『お前は、相変らずの千里眼だよ』と私は吐き出す様に応じた。彼は、いつもする道化した様な笑いをしてみせた。……」という文章が続いていくことになるわけである。

それでは、「……私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた」というのは、一体、どういうことを意味するのか？ それは、次のようなことではないかと思う。つまり、その理由の一つとしては、どこまでも対象の中に深く溶け込んで、その対象を「内から観ている状態」であったが、そのような「心の状態」を長く続けることが苦痛になってきたということであり、また、なぜ、「動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた」のかと言え、それは、「没我的な精神状態から早くふつうの精神状態に戻そうとするため」と、もう一つの「大きな理由」(こちらのほうが遙かに大きな理由である)が、中原中也に自分の「心の中」までも見透かされているのじゃないかという思い(つまり動揺)からということになるのだろう。そして、「……お前は、相変らずの千里眼だよ」と言ったのは、中原中也の「もの見方、とらえ方、感じ方」などが、まさに「どこまでも対象の中に深く溶け込んで、その対象を『内から観る』という見方である」からである」とともに、自分の「心の中」までも同じような方法で見透かされているのじゃないかという思いからである。それは、「……花びらの運動は果しなく、見入っていると切りがなく、私は、急に厭な気持ちになって来た。我慢が出来なくなってきた」。そのような自分の「心の中」をまさに察知したかのように、「……その時、黙って見ていた中原が、突然『もういいよ、帰ろうよ』といった」からであると同時に、それだけではなく、中原中也に対する自分の「考えや思い」までも同じような方法で見透かされているのではないかと思っただろう。それは、絶え間なく散る海棠の花びらを黙って見入っているうちに、小林秀雄の「心の中」にふと「中原中也の死」という「想い(イメージ)」が浮かんできたとしても何も不思議なことではないだろう。だからこそ、「……私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた」ということにもなるわけだ。

ちなみに、「……俺達にはもう駄目だが、若い男や女は、どんな飛んでもない考えか、愚行を挑発されるだろう」という言葉の説明が残っているが、それは、次のようになるかと思う。つまり、若い人というのは、ちよつとした言葉にも影響を受けやすいものであるが、それがより魅力的な言葉や考え方であれば、なおさらものに影響を受けてしまい、思慮分別もなく一気に暴走や愚行に走ってしまう傾向があるということである。そして、その中の「愚行」という言葉の一つとしては、例えば、「自殺を図る」ということもあるのかも知れない。それはともかく、小林秀雄の「心の中」にふと「中原中也の死」という「想い(イメージ)」が浮かんできたことは、ほとんど間違いないことだろう。そして、まさに「……その時、黙って見ていた中原が、突然『もういいよ、帰ろうよ』といった」のを聞いて、「……私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた」のも、まさに自分の「心の中」にふと浮かんできた「中原中也の死」という「想い(イメージ)」を、中原中也に見透かされたに違いないと思ったからだろう。だからこそ、「……私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求める」ことにもなるわけだ。そして、「お前は、相変らずの千里眼だよ」と私は吐き出す様に応じた。その理由も、中原中也の「もの見方、とらえ方、感じ方」などが、まさに「どこまでも対象の中に深く溶け込んで、その対象を『内から観る』という見方である」からであるとともに、自分の「心の中」までも同じような方法で間違いなく見透かされているに違いないという思い(つまり動揺)からなのである。そして、そのような「もの見方、とらえ方、感じ方」こそは、まさに人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密に

とらえることができ得る、まさに「直知・直観」を生む見方でもあるわけである。そして、そのような「見方」を中原中也は、恐らく、「……自然と生まれながらに持ち合わせていた」ことに、小林秀雄は、少なからず驚いたということになるのだろう。

\*

\*

さて、本文に戻ると、中原が鎌倉に移り住んだのは、死ぬ年の冬(二月)であった。前年(十一月)、子供をなくし、発狂状態に陥った事を、私は知人から聞いていたが、どんな具合に恢復し、どんな事情で鎌倉に来るようになったのか知らなかった。久しく殆ど絶交状態にあつた彼は、突然現れたのである。私と彼との関係は、一種の悪縁であつたと思つている。中原と会つて間もなく、私は彼の情人に惚れ、三人の協力の下に(人間は憎み合う事によつても協力する)、奇怪な三角関係が起き上り、やがて彼女と私は同棲した。この忌わしい出来事が、私と中原との間を目茶目茶にした。言うまでもなく、中原に関する思い出は、この所を中心としなければならぬのだが、悔恨の穴は、あんまり深く暗いので、私は告白という才能も思い出すという創作も信じる気になれない。——中原は、女が盗まれた時、突然として僕は「口惜しい男」に変わった、と書いてあるだけであつた。

\*

\*

例えば、夏目漱石の『こころ』という作品は、非常に有名であるが、その「作品」のなかで、いわゆる「一人の女性」(お嬢さん)をめぐる「二人の親友」(先生とK)との「三角関係」が出てくるが、それと全く同じように、まさに「一人の女性」(長谷川泰子)をめぐる「二人の親友」(小林秀雄と中原中也)との「三角関係」が発生したということである。そして、「女性」(長谷川泰子)は、結局は「小林秀雄」を選んで、同棲中であつた「中原中也」から離れたということである。これは、「女性」(長谷川泰子)の選択であり、ある意味では「中原中也」にとつてもどうしようもないことである。

一方、夏目漱石の『こころ』という作品の場合、いわゆる「一人の女性」(お嬢さん)は、Kが自分に切ない「恋心」を寄せていることは全く知らなかったが、たとえ知つていたとしても、「一人の女性」(お嬢さん)は、迷うことなく、「先生」を選んでいたのであり、それゆえ、この「三角関係」は、「先生」がお嬢さんを手に入れ、そして、「K」は、やがて、「自殺」を遂行するという結果になってしまうのである。

そして、「作者」(夏目漱石)は、この「作品」の中で非常に有名な「恋は、罪、悪である」と言っている。それは、一体、なぜなのかと言えば、それは、次のようなことである。——つまり、人を本気で愛すれば、必ず、誰かが傷つくことになる。人を傷つけずにはおかないものだからである。誰もが「罪の意識」(或いは「良心の呵責」といふものを、多かれ少なかれ、背負うことになる。だからこそ、「恋(恋愛)は罪悪である」とともに、人間の「罪」(悪業)というものを誰もが嫌が上でも「思い知る」ことになるのである。

それをもっと掘れば、例えば、友達関係、同居関係、恋人関係、夫婦関係、愛人関係、その他、すべて同じことである。つまり、「男女」(或いは「同性」)同士が、本気で相手と深く「関わる」(或いは「愛する」)ことになれば、必ず、お互いの「利己的自我(エゴ)」と利己的自我(エゴ)とが本気でぶつかり合うことになる。そして、お互いの関係が「うまくいっている」時には、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができ得るかも知れないが、一方、お互いの関係が「うまくいかなくなった」時には、逆に、「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨

念、その他」の感情に変わってしまうのである。つまり、本気で相手と深く「関わる」ということは、まさにそういうことであり、しかも、それが「男女の関係」であれば、それだけより「どろどろとした生々しいもの」になっていくのである。

例えば、それは、友達関係、恋人関係、夫婦関係、愛人関係、その他、すべて同じことであるが、つまり、「男女」（或いは「同性」）同士が、本気で相手と深く「関わる」（或いは「愛する」）ことになれば、ほかの異性と親しく話をしているような場面などに出つくわすと、その人の「心の中」では、押さえ難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」その他の「負の感情」に襲われてしまうものである。——それは、誰の「心の中」でも全く同じことであり、それは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、相手の「愛情」が「他の対象」へと向かうことを「恐れている」のである。それでは、なぜ、それを「恐れる」のだろうか？ それは、相手の「愛情」が自分に向かっているからこそ、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができるのであり、逆に、相手の「愛情」が自分以外の「他の対象」へと向かってしまえば、今まで得ていたそのような様々な「喜びの感情」を味わうことができなくなってしまうと共に、今度は、逆に、実に様々な「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、その他」の、まさに「負の感情」に変わってしまうからである。

\*

\*

さて、「……中原に最後に会ったのは、狂死する数日前であった。彼は黙って、庭から書斎の縁先きに這入って来た。黄ばんだ顔色と、子供っぽい身体に着た子供っぽいセルの鼠色、それから手首と足首に巻いた薄汚れた繻帯ほうたい、それを私は忘れる事が出来ない」とある。ちなみに、一九三七年（昭和十二年）九月に、中原中也是、『在りし日の歌』の原稿を清書して、小林秀雄に託している。そして、その年の十月二十二日に、中原中也是、結核性脳膜炎を発症して、満三十歳の若さでこの世を去っているのである。

\*

\*

汚れちまった悲しみに

今日も小雪の降りかかる

汚れちまった悲しみに

今日も風さへ吹きすぎる

中原の心の中には、実に深い悲しみがあって、それは彼自身の手にも余るものであったと私は思っている。彼の驚くべき詩人たる天資も、これを手なずけるに足りなかった。（中略）、言い様のない悲しみが果てしなくあった。私はそんな風に思う。彼はこの不安をよく知っていた。それが彼の本質的な抒情詩の全骨格をなす。彼は、自己を防御する術すべをまるで知らなかった。世間を渡るとは、一種の自己隠蔽いんぺい術に他ならないのだが、彼には自分の一番秘密なものを人々に分かちたい欲求だけが強かった。（中略）、人々の談笑の中に、「悲しい男」が現れ、双方が傷ついた。善意ある人々の心に嫌悪が生れ、彼の優しい魂の中に怒りが生じた。彼は一人になり、救いを悔恨のうちに求める。汚れちまった悲しみに……これが、彼の変わらぬ詩の動機だ。終わりのない畳句畳句だとある。

\*

\*

さて、われわれ人間の、いわゆる「人間形成」というものは、誰でもそうであるように、

一つは、「遺伝的要素」と、もう一つは、その「環境的要素」(つまり「生い立ち」)から極めて大きな影響を受けて形成されるものである。それゆえ、中原中也も決して例外であるはずはなく、中原中也がいかに中原中也らしい「人間形成」をするためには、一つは、「遺伝的要素」と、もう一つは、その「環境的要素」(つまり「生い立ち」)から極めて大きな影響を受けているということである。そして、「遺伝的要素」としては、中原中也の弟によると、「……農から出て立志した父の『荒い血』と封建の臣として淘汰された母方の『静かな血』の混血から成るもの」とある。一方、「環境的要素」(つまり「生い立ち」)のほうは、中原中也の「全過去」(それは中原中也の「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」)などから、自ずと中原中也なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが形成されることになるのである。

そして、中原中也の場合、その「環境的要素」(つまり「生い立ち」)のどのようなところが、どのように作用して、中原中也のような人間になったのかは、中原中也の研究者ではないので厳密には知らないが、小林秀雄の見方によると、「……中原の心の中には、実に深い悲しみがあつて、それは彼自身の手にも余るものであつたと私は思っている」ということである。ただ、ここで面白いと思うのは、小林秀雄は、「……世間を渡るとは、一種の自己隠蔽術に他ならない」と言っているところである。それは、一体、どのような「意味合い」になるのかと言え、それは、次のようなことである。つまり、「ほんとうの自分」(特に他人に「知られたくないようなこと」)は、なるべく隠して、他人と関わろうとするのが、まさに「処世術」(つまりは「世渡り」)だと言っているのである。

例えば、太宰治は、自分の「人間恐怖」を隠すために、有名な「道化」を演じるようになったと告白している。そして、『斜陽』のなかでも、「……僕が早熟を装って見せたら、人々は僕を、早熟だと噂した。僕が、なまけものの振りをして見せたら、人々は僕を、なまけものだと噂した。僕が小説を書けない振りしたら、人々は僕を、書けないのだと噂した。僕が嘘つきの振りしたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。僕が金持ちの振りしたら、人々は僕を、金持ちだと噂した。僕が冷淡を装って見せたら、人々は僕を、冷淡なやつだと噂した。けれども、僕が本当に苦しくて、思わず呻いた時、人々は僕を、苦しい振りを装っていると噂した。どうも、くいちがう」とある。

\*

\*

これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、われわれ人間というのは、その人の「表面的な現象」(つまりその人の表面的な「姿・形」すがたかたち)やその人の表面的な「言動」などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているところがあるが、そのような傾向がはつきりあるからこそ、われわれ人間というのは、どうしても「外的事実」というものを、より重視するようになるとともに、結局は、それによって、自分というものを少しでもよく見せようとするにもなるわけである。——つまり、「外的事実」というのは、その人の「身体的特徴」(容姿・容貌)などをはじめ、外に現われる様々な言動、例えば、仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他等で、その時々表れる、その人の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他」、それらに加えて、その人の「……生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」などである。

一方、「内的事実」というのは、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)に生じ

て来る様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などであるが、それを大きく三つに分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々を生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」として、今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」などの膨大な量の蓄積（蓄え）と遺伝子等があるかと思う。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ているのであり、その人の「内的事実」が、いったいどういうものであるかは、よく分からないものである。それゆえ、われわれ人間は、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ては、それをもとにして、その人に関してあれこれ判断し、評価しているということである。

一方、その人自身というのは、逆に、その人の「内的事実」を生きているということであり、それゆえ、「外的事実」と「内的事実」との間には、当然のことながら、多かれ少なかれ、ズレがあるということである。

\*

\*

そして、太宰治という人は、出来るだけ人とうまく関わろうとして道化を演じて、自嘲的になり、そのために心身ともにすり減らしてしまう。一方、中原中也という人は、逆に、人との関係をわざと壊し傷つけ合うように関わり、その結果、自分も深く傷つき孤立し、そして、そのような人との関わり方しかできない自分を「悔恨」（後悔）しながらも、すべての「救い」を「詩作」の中に求めたということである。それを小林秀雄は、次のように（実に見事に）表現している。つまり、「……人々の談笑の中に、『悲しい男』が現れ、双方が傷ついた。善意ある人々の心に嫌悪が生れ、彼の優しい魂の中に怒りが生じた。彼は一人になり、救いを悔恨のうちに求める。汚れちまった悲しみに……これが、彼の変わらぬ詩の動機だ。終わりのない畳句だ」と言っている。

つまり、人々が楽しく「談笑」（おしゃべり）をしている所に、「悲しい男」（いわば「心に傷を持った男」）が現われ、わざと傷つけ合うように関わり、双方が傷ついた。善意ある人々の心に（中原中也に対する）嫌悪が生れ、一方、彼の優しい「魂の中」に怒りが生じた。そして、彼は一人になり（つまり孤独）になり、「詩作」だけが中原中也の唯一の「救い」（或いは「心の拠り所」となるのである。——つまり、「汚れちまった悲しみ」というのは、すなわち、「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」のことであり、それが、まさに「汚れちまった悲しみ」であり、それを「源泉」として、中原中也の「詩」が生み出されて来るのである。

汚れちまった悲しみに

今日も小雪の降りかかる

汚れちまった悲しみに

今日も風さえ吹きすぎる

汚れちまった悲しみは

たとえば狐の革裘（かわごろも）

汚れちまった悲しみは

小雪のかかってちぢこまる

汚れっちまった悲しみは

なにのぞむなくねがうなく

汚れっちまった悲しみは

倦怠(けだい)のうちに死を夢(ゆめ)む

汚れっちまった悲しみに

いたいたしくも怖気(おじけ)づき

汚れっちまった悲しみに

なすところもなく日は暮れる……

まず、「汚れちまった悲しみ」とは、まさに「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶(想い出)」のことであるが、その上に、今日も「小雪」の降りかかる。この「小雪」というのは、いわば「いやなこと・傷つくこと」などであり、今日も「小雪」(いわば「いやなこと・傷つくこと」)などが降りかかる。そして、今日も「風」さて吹きすぎるとあるが、この「風」は、恐らく、一つは、自分の「心の中」に吹き抜ける空しい「虚無の風」であるとともに、もう一つは、恐らく、(中原中也に対する)他人の「噂」(風評)でもあり、しかも、その「噂」(風評)は、言うまでもなく、それは、良い「噂」(風評)などではなく、むしろ悪い「噂」(風評)などが巷(ちまた)に吹き過ぎることでもあるのだろう。

次に、「汚れちまった悲しみに」に、それは、「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶(想い出)」のことであるが、その「一つの例」としては、例えば、まさに「狐の革裘」があるということである。——例えば、人間をだます動物には、有名な「狸や狐」その他がいるが、狸は、どちらかと言えば、オスのイメージが強く、一方、狐は、どちらかと言えば、メスのイメージが強いかと思う。つまり、この「狐の革裘」というのは、いわば「長谷川泰子」(もっと広い意味では三人の「三角関係」)のことであるが、それが、まさに「汚れちまった悲しみ」、つまり、「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶(想い出)」の中の、一つの「実例」になるということである。そして、「……小雪のかかってちぢこまる」とあるが、これは、「小雪」(いわば「いやなこと・傷つくこと」)などが、自分に降りかかって来て、まさに「ちぢこまる」(つまり「身も心も萎縮する」というようなことである)。

次の「……汚れっちまった悲しみは、なにのぞむなくねがうなく、汚れっちまった悲しみの『悪の華』の中に出てくる、「……地上を好んで廃墟(虚無の意味や価値のないもの)と化し、欠伸の中に、世界を嘔吐。これぞ、倦怠。——眼に思はずも涙を湛へ、長き煙管を燻らせて(ああでもないこうでもない)と長き思索を巡らして)、断頭台(死)の夢を見る。読者よ、君はこれを知る。……」という内容とどこか共鳴するところがあるのかも知れない。つまり、「虚無の世界」に深く沈んでいる「心的状態」でもあるのである。

最後は、「汚れちまった悲しみに」に、それは、「……人を傷つけ、そして、自分も傷つ

いてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」のことであるが、その「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」に痛々しくも怖気づいてしまい、そして、また、「汚れちまった悲しみ」に、それは、「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」のことであるが、その「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」に対して、どうする術（方法）もなく日は暮れる（月日は流れるばかり）である。そして、この「汚れちまった悲しみ」（それは「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」）を「源泉」として、中原中也の「詩」が生み出されて来るということである。

\*

\*

「参考文献」

※底本「方法序説」デカルト・落合太郎訳（「岩波文庫」）

※底本「考えるヒント4」小林秀雄著（「新潮文庫」）